

志太の建具師

●志太の建具師は、指物師が前身

志太地域の建具師の起こりも、江戸時代、寛永十一年（一六三四）三代將軍徳川家光の静岡浅間神社の造営に端を発しています。

このとき、指物師や宮大工たちが全国から集められ、その技術者集団の一部が静岡だけではなく、近郊の志太地域にも移り住んできました。

建具師の前身は一般的には大工といわれていますが、地方では必ずしも同様ではなく、指物師から建具師になったものや、指物師と建具師を兼ねていたものなど、その形態は様々です。

志太地域では、多くが指物師を前身とし、

桐箆職人と建具職人とに二分していきました。もっとも昔は、桐箆を作りながら、空いたときに建具や指物をつくっていたといえますから、これも当初は明確に分かれていたわけではありません。

●地域の木材を生かした建具

建具の技法として、地域的な特徴は、それほどありません。京都と江戸で若干の差は見受けられますが、とくにこの地域だからこの建具といった傾向がないのが特色です。

強い特徴を挙げれば、その地域に産出する木材を活かして作ったことでしょうか。その意味では、志太地域は昔から良質の杉材や檜材が産出するため、それらを活かした建具が多く、杉材は、木目が真っ直ぐで加工しやすく、狂いが少ないため、多く使われました。また特に檜材は、見た目の良さもあって好まれる傾向にありました。